筑波のかえる 第36号

脳損傷友の会・いばらき
2017年 9月15日発行

わたしの一枚

脳損傷友の会・いばらき
〒300−2622
茨城県つくば市要1187−299
筑波記念病院リハビリテーション部内
TEL　080−8430−3365
FAX　029−877−4688
E-mail　kojinouibaraki@yahoo.co.jp
H.P　http://www.geocities.jp/nousonshouibaraki/index.html

≪３６号内容一覧≫

はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
役員会から　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
意見交換会・高次脳機能障害支援従事者研修会　・・・３
システム整備協議会・ＴＫＫ　・・・・・・・・・・・・・４
要望書提出　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
神栖の広場　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
県北の広場　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８
コラージュ教室　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
がんばってる人　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２
就労施設訪問『オーガファーム』　・・・・・・・・・１３
就労施設訪問『みのるの郷』　・・・・・・・・・・・１４
会員の声・編集後記　・・・・・・・・・・・・・・・・・１５

今月の表紙は、当事者のＭさんが描いた絵です。
Ｍさんが通っているデイサービスで、職員さんたちの支援をいただきながら、大好きな花の絵をかきました。夏にぴったりの、涼しげな絵です。

はじめに

今年の夏は気温の変動が激しくまた全国規模で豪雨による災害に見舞われました。「例年にない・・何十年に一度の・・」そう繰り返されるニュースを耳にするたび、被災された人たちの思いに胸が痛みます。この“異常な災害”が“例年の“ことになりませんように祈るばかりです。

さて、８月末には会員賛助会員あわせて１１名にて、県へ要望書を提出してまいりました。２日前に新知事が誕生したという微妙な時期でしたが、これから県の体制がどう変わるのか期待と不安の中、私たちは、体制がどう変わろうと、新しい支援体制で、高次脳機能障害の診断とリハビリ、生涯にわたる安定充実した支援が受けられるよう、強く要望してきました。

県内には、いろいろな障害者の会や家族の会があります。会に入れば病気が治るとか障害が改善するわけでも優遇制度があるわけでもありません。それでも、それぞれの会が何年も何十年も継続しているのは同じ悩みを持つ仲間がいるからではないでしょうか。「一人ではない、ここに来ると仲間がいる」。分かり合い、一緒に考えあうことで、そして何気ない会話をすることで、また明日を生きる力に繋がっていくものだと思います。会の活動も、何かをしたからと言って急に結果が見えるものではありません。それでも、ゆっくりと自分たちにできることを続け、次の人たちにバトンを渡す。それが私たちの役目なのかもしれません。

さてこれから秋本番。１０月には県のリハビリ講習会も開催されます。コラージュ教室に引き続いて、県リハビリテーションセンター小原課長の指導の下、俳句セラピーも毎月開かれます。難しく考えず一緒に過ごしませんか？身近なところに仲間はたくさんいます。

研修会や講演会ばかりでなく、家族の会や交流室、集会活動を楽しむことで、より有意義で実り多い秋を家族とともに過ごすことができますように。

（浅野）

役員会から

平成 29 年度　脳損傷友の会・いばらき　事業予定

項目 月	会　　員	役　員　会	そ　の　他
9月	８日　家族会交流室 13 日　神栖集会 22 日　県北の集い 30 日　俳句教室	12 日　部長訪問	15 日　会報紙発行
１０月	８日　県北集会 11 日　神栖集会 13 日　家族会交流室 22 日　俳句教室	17 日　役員会	７日　リハ講習会
１１月	８日　神栖集会 10 日　家族会交流室 24 日　県北家族の集い 25 日　俳句教室	12 日　県南集会	
１２月	８日　家族会交流室 13 日　神栖集会 17 日　県北集会	19 日　役員会	２日　リハ講習会 15 日　会報紙発行

役　員　会　報　告

平成 29 年　6月２０日　　議事（１）29 年度総会について
（２）家族会意見交換会開催に向けて
（３）要望書たたき台の検討

平成 29 年　8月　8日　　議事（１）要望書提出、当日の進行について
（２）家族会意見交換会を振り返って
（３）県リハ研修会の報告

※　今年度より、役員会は原則として２か月毎としました。

家　族　会　交　流　室　か　ら　の　報　告

平成 29 年　７月 14 日　　相談者４名（電話相談１名）
県リハ:廣末氏、家族会員３名
記念病院：山倉氏、

※ ８月は祝日と重なったため、開設しませんでした。

家族会意見交換会

７月 18 日県立リハビリテーションセンターの一室にて開催しました。２時間以上もかけて遠方より参加して下さった方々もいて、昼食を共に頂きながら和気あいあいとそしてまた熱心に意見交換をしました。

まずは日頃の生活や就労の様子、成年後見制度、財産管理などにも話が及びました。高次脳機能障害者の現状ももちろんですが、家族亡き後の当事者達の将来が大いに心配なことが一致してあげられました。皆 10 年、20 年の長い期間を悩み苦しみ試行錯誤の繰り返しで過ごして身にしみる体験ばかりがありますから、心配は当然です。家族としてできることは、当事者への回復の働きかけと共に、将来の安心した生活を得るために行政や福祉、医療、学校など社会全体への理解啓発、そして支援体制の構築への努力を重ね、どの年代の高次脳機能障害者も安心して過ごせる社会参加の場を広げたいという思いを話し合いました。

そして、家族会の存在は、介護の日々をがんばれる心の拠り所になっていることは皆の共通の気持ちでした。ストレスの高い高次脳機能障害者との生活をしながら、活動との両立はかなりの負担です。当事者はもちろんですが家族へのケアの視点も加えて、支援拠点機関が様々な活動の中心的な役割を担って、中途障害者としての問題も抱えた上に発達障害などのような支援がまったくない高次脳機能障害者に手を差し伸べて欲しいと話し合いました。

この日のために当事者の預かり先を探すなど算段をいただいてご参加下さいました皆様、本当にありがとうございました。今後の活動についてさらに検討を深めて行きたいと思います。

高次脳機能障害支援従事者研修会

７月 28 日、古河福祉の森会館にて古河保健所の協力で上記の研修会が開催されました。県立リハビリテーションセンターの支援ネットワーク構築事業として行われ、支援コーディネーターの基礎講義と当事者家族の体験談、対談という内容でした。昨年から当会会員の協力参加を続けていますが、今回は、県リハ職員でもありご主人を介護してきた方と役員の滝沢さんと丹羽が協力してきました。参加者は、22 名で少なめでしたが、圏域内病院の医師やソーシャルワーカー、臨床心理士、理学療法士、訪問看護職員、相談支援専門員、介護支援専門員、民生委員、保健所職員と多彩な職種の方々の参加でした。熱心に耳を傾けて下さる皆さんの様子、涙を流して激励の言葉を掛けて下さる様をみて、体験を語ることの力をあらためて再認識しました。

参加者の感想は、当事者も家族も大変な苦労をしてきたことが良く分った。今後は当事者、家族の双方に気を配って行きたい。話を聞いていつも思っていたこととは違うことに気づけた。何より社会資源の少なさを痛感する。取り組み方の工夫を考えてもらいこのような会を知らせて多くの方に聞いてもらいたいとの感想でした。今年度内に、他に鉾田保健所、龍ケ崎保健所とも連携し開催の予定です。

システム整備協議会

８月 10 日県立リハビリテーションセンターにて開催され、今年度の事業進捗状況、相談支援、普及啓発についての報告がありました。★★★相談電話窓口が県立医療大学へ移転後の特徴については、県リハが担っていた入所・通所機能を地域毎の資源（自律訓練、グループホーム、施設入所、入院等）で代替えするケースが増えているため、関連機関が広がり相対的に延べ件数が増加した。資源の不足により他県の支援拠点を利用するケースすらある。他県との比較において、高次脳機能障害の診療と、生活支援との連絡に隔たりがあるように思われる。同じく県の地域生活支援事業に位置づけられている発達障害との比較においても診断に結びつく機会の差が影響していることは明らかである。医療機関の不足に起因するものと考えられる。

普及啓発として、ホームページ(ＨＰ)高次脳機能障害者支援情報サイトを市町村や社協のＨＰへリンク、広報誌への情報掲載の依頼や、障害説明や対応の仕方についての小冊子配布を行っている。リンクや広報誌掲載は効果が大きく相談件数が増加する。★★★とのことでした。

議題として新支援拠点について報告があり意見交換をしました。拠点機関の候補先との話し合いを重ねているとの報告でした。今の段階では新支援拠点機関のイメージは未だに描けないままで、３月閉鎖の期限の迫る中不安が募るのを拭えませんでした。

東京高次脳機能障害協議会（ＴＫＫ）

８月 27 日浜離宮朝日ホールにて開催。来賓に小池百合子都知事を迎え、暖かく心強い激励の言葉があり、TKK の活動そしてそこに加盟する 30 団体の活動紹介から始まりました。

渡辺修先生（慈恵医科大第三病院リハビリテーション科診療部長、教授、医師）の分かりやすいそして巧みな講義が素晴らしかったです。長谷川幹先生（三軒茶屋リハビリテーションクリニック院長、医師）と、脳卒中で倒れ片麻痺になった鮨職人の磯貝さんご夫婦の夫婦愛と復職までの道のりの対談は、未来志向で心が明るくなりました。

渡辺修先生と、ひき逃げ事故にあった野口さんとそのお姉さん方の、リハビリ、復職、新たな就労への挑戦など、姉弟愛に満ちた対談、素晴らしいお姉様がたと頑張りやのご本人に応援したくなりました。

最後の松本方哉氏の記念講演は、くも膜下出血で倒れた奥さんの介護をしながら、フジテレビへ勤めながらの介護をジャーナリストとしての視点からとらえた話でした。メディアにおられた方であり、執筆のプロとして当事者を介護する家族の思いを劇的な表現で伝えて頂き、会場に感涙の渦を引き起こしました。2025 年に日本社会を襲うであろう高齢化について、高次脳機能障害者とその家族たちは、大きな壁に立ち向かうことになるのではないかとの懸念を持ちその事態を明らかにしたいと話していました。最後に、ア明るく、ナ何でも相談して、ユ勇気を持って、キ希望を大切に！と締めくくりました。

要望書提出

日　時　　８月29日（火）
参加者　　会員８名　　賛助会員２名

県庁13階の窓からの景色は、毎年違って見えるのですが、今年は今までになく変わって見えました。景色はいつも同じはずなのに、県の方々の受け止め方が違っていたのか、あるいは自分の気持ちの変化か、何かわかりませんが、すがすがしい気分で要望書の提出を終えました。

１時間という限られた時間の中で、私たちの要望がどのように伝わるかは分かりませんが、それでも少しずつ変わり始めているところがあるはずです。

何年も続けてこられた役員の皆さま、忙しい中を参加してくださった賛助会員の方々、そして、毎年取材に駆けつけてくださる茨城新聞の斉藤記者に、敬意を表したいと思います。

最後に、会長が当事者の家族が茨城新聞の「県民の声」に投稿された文章を、涙で声を詰まらせながら読んでくださいました。

高次脳機能障害という後遺症に苦しんでいる人たちが、大勢いるという事は、県の担当者の方々に十分に伝わったのではないでしょうか。

会員O

支援施設設置へ
県に要望書提出

高次脳機能障害の家族会

高次脳機能障害の家族会「脳損傷友の会・いばらき」が29日、県立リハビリテーションセンター廃止後の支援体制の在り方について県に要望書を提出した。会員ら11人が県庁を訪れ、丹羽真理子会長が松山和規・県障害福祉課長に要望書を手渡した。

高次脳機能障害は、交通

松山和規・県障害福祉課長（左）に要望書を手渡す「脳損傷友の会・いばらき」の丹羽真理子会長＝県庁

年3月に廃止される。このため県は別の医療機関に支援拠点機関を移す方向で協議している。

同会は毎年、要望書を提出しているが、今回は新たな支援拠点機関の在り方を中心に提言。高次脳機能障害に特化した診断とリハビリのほか、患者の生涯にわたって一貫した支援体制を備える「高次脳機能障害支援センター」の設置などを求めた。

平成29年８月30日
茨城新聞に掲載

≪要望書の内容≫

「高次脳機能障害支援センターの設置と支援体制の構築について」

1　高次脳機能障害支援センターの設置

2　総合的リハビリテーションセンターの設置

3　以上1、2、ともに茨城県立医療大学（病院）に併設する

≪提出先≫

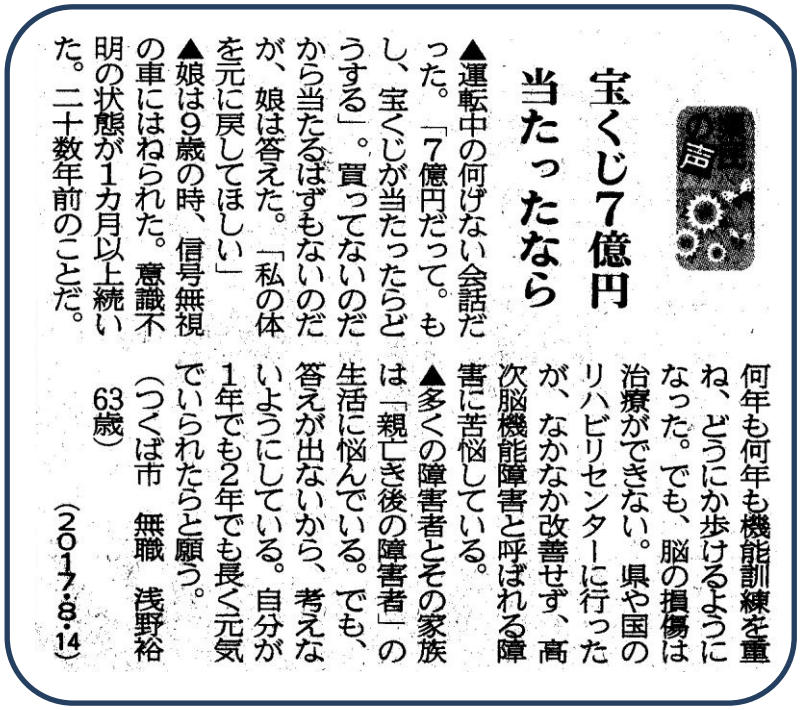
〇県保健福祉部障害福祉課
- 松山課長
- 村田副参事
- 網倉課長補佐
- 中島係長

〇県立リハビリテーションセンター
- 小原相談指導課長
- 鶴岡高次脳機能障害支援コーディネーター

〇厚生総務課
- 石浜課長

要望書を提出した際に、丹羽会長が読み上げた新聞記事です。

全ての家族の思いを、ありのままに代弁してくださった文章です。



声

宝くじ7億円当たったなら

▲運転中の何げない会話だった。「7億円だって。もし、宝くじが当たったらどうする」。買ってないのだから当たるはずもないのだが、娘は答えた。「私の体を元に戻してほしい」

▲娘は9歳の時、信号無視の車にはねられた。意識不明の状態が1カ月以上続いた。二十数年前のことだ。何年も何年も機能訓練を重ね、どうにか歩けるようになった。でも、脳の損傷は治療ができない。県や国のリハビリセンターに行ったが、なかなか改善せず、高次脳機能障害と呼ばれる障害に苦悩している。

▲多くの障害者とその家族は「親亡き後の障害者」の生活に悩んでいる。でも、答えが出ないから、考えないようにしている。自分が1年でも2年でも長く元気でいられたらと願う。

（つくば市　無職　浅野裕　63歳）

（2017.8.14）

神栖の広場

≪８月の神栖集会に関して≫

支援コーディネーターによる相談も、３回目を迎えた８月は、あいにく外部からの相談者もなく、私たち家族会員の悩みや地域医療の問題などを、小原・清水両先生に聞いていただきました。

過去２回は、主に傍聴的役割だったので、この日はこの日で、とても充実した貴重な時間となりました。

遠方からせっかく出向いていただいたのに、参加者が少なく・・・残念！な思いでした。

それぞれ数ある会合でも、かかえる問題点は同じではないでしょうか？

“参加者数・参加率のアップ”ですよね。

≪家族会意見交換会に参加して≫

去る７月 18 日、友部の県立リハビリテーションセンターでの、“家族会を存続させるためには・・・”の意見交換会に、神栖からも参加をしました。恥ずかしながら私は、初参加状態でしたが・・・

問題点は、とてもとても深～すぎて・・・！！それでも、手持ちのランチをいただきながら、とても和やかなひと時でした。

皆さん、それぞれにも束縛された時間がありながらも、がんばっていました。許される時間内で、私には何ができるだろうか・・・？前向きに、少しずつでも参加・協力しなければ・・・と、思いました。

神栖集会は

毎月　　第２水曜日　　１０：３０　～　１３：００まで

場所は　　福祉会館　相談室　です

10 月・12 月・２月は、県立リハビリテーションセンターから支援コーディネーターが来会し、専門的相談にのっていただけます。この機会に、ぜひ気軽にご利用ください。

コラージュ教室

今年で３年目になるコラージュ教室ですが、回を追うごとに家族会の皆さんの作品の素晴らしさに驚かされます。

コラージュ療法とは自分の好きな雑誌やチラシなどを好きなように切って貼るものです。白い用紙に何をどうやって貼っていこうかと悩む方も多いのですが、最近では「今回はこれにしようって決めてたんです」「今度のコラージュに使おうと思ってとっておいたの」など。自分でテーマを決めていたり、大事に切り抜きを取っていただいていたりと次のコラージュを楽しみにしてくださる方も増えてきました。

コラージュ療法の良いところは、どんなことも自由に表現できるところです。正解も不正解もありません。それこそ世界にひとつの作品です。また、あの静寂な中でも居心地の良い穏やかな雰囲気がそれだけでセラピーのようです。ちょっと愚痴をこぼしたり、クスクス笑ってしまったり。どんなことも許容されるあの空気感が、これまで友の会として皆さんが共に歩んできた道のりの反映なのだと常々感じています。「それ、良いじゃない」「上手ね」なんて。当事者やご家族同士で作品を通して認め合え、当事者のみんなから「お母さん、がんばってるものね」なんて嬉しい声がかかることもしばしば。

さらに、月１回の教室のなかで気付くと多くの方の作品のなかで共通のテーマがみつかることもあります。今年は「輪」「円」＝「和」でした。最後にご自分の作品についてお１人ずつ話してもらうのですが、多くの皆さんの作品のどこかにこのテーマが隠れていました。

個々の作品の紹介は紙面上割愛させてもらいますが、テーマがいつの間にか潜在的に共有されている一体感は、作品を集団で一緒に作ることの大きな付加価値だと思います。

皆さんが作品に没頭したり、笑い合ったり。また別な家族が当事者の方の横に寄り添い話を聴いていたり、普段は聴けない当事者の方の内面がそっと覗けたり。コラージュを通して自分の心のなかのものをそっと取り出し眺め、またしまう。作りながら心の中を整理して表現していく。それをみんなで分け合っていくものの一つにこれからもこのコラージュ療法があると良いなと思っています。

会田記念リハビリテーション病院
臨床心理士　　笹島　清美

コラージュ教室に参加して

私はコラージュ教室に平成 28 年度から平成 29 年度までに合計 5 回参加させていただきました。学生研究としてコラージュの家族間に与える効果をテーマにアンケートなどに協力をしていただきました。

皆さんに分け隔てなく接してもらい、毎回楽しむことができました。コラージュを作ることで気分転換になり、発表では皆さんから褒めていただくことで自分を受け入れることができました。

今回の教室ではファシリテーターとしてではなく、参加者の立場で参加しました。学校を卒業した後はセラピストとして接することがほとんどだと思いますので貴重な体験だったと感じています。特にご家族が当事者の方を気にすることなくコラージュに取り組めた際に喜んでいたのが心に残っています。

今後コラージュ教室で学んだことや感じたことを忘れずに作業療法士となった後にも生かしたいと思います。

茨城県立医療大学　保健医療学部　作業療法学科４年　酒井 勇輔

平成 27 年８月から開始されたコラージュ教室が、三年目となり、私は今回（平成 29 年８月）で、11 回目の参加です。

当初は、“コラージュ”の意味も分からず、ひたすら雑誌やパンフレットから気になる絵や写真を切り取り、貼るという作業を続けていました。教室に参加していく中で、1 回目の作品から今回の作品までの変化が、順を追って、すべて意味づけがあることを感じました。

コラージュが終わった後は、ストレス発散、満足感、達成感などが得られ、言葉に表現できない、自分の気づかない点を見つけることができる、とても楽しい時間です。無意識の自分を、見つめることができる時間でもあります。

今回、先生より「三年目にして“曼荼羅”に近づいてきたね。」との話があり、私も成長しているんだな・・と感じ、うれしく思いました。来年も、ぜひコラージュ教室に参加したいと思います。

私の気持ちが安定することが、これからの支援を前向きにしていくことにつながると信じています。

会員K

がんばってる人①

◎『ボッチャ』に夢中です。

牛久市　　石崎　元啓さん

☆ボッチャを始めたきっかけは？

「12 年位前、県リハに入所していた時の体育の授業でボッチャという競技を知りました。県リハを出てから、何かスポーツをしたいと思い、探していたところ、県立医療大でボッチャをやっていると聞き、参加するようになったのがきっかけです。（本当はスキーをやりたかったのですが、スキー連盟からは返答がなかったのであきらめました。）

家が牛久市なので、練習場所に近いというのも理由の一つです。」

☆練習は、どこで、どのくらいしていますか？

「下妻特別支援学校の体育館を借りてやる時もありますが、今は夏休み中なので、お借りできません。県立医療大の体育館では、月１回、ほかのスポーツと一緒に練習をしています。体育館の半面を車いすバスケ、残りの半面を僕たちのボッチャで使っています。本当は、もっと練習がしたいです。」

☆現在、会員数は何人ですか？

「茨城ぼっちゃ倶楽部というグループを立ち上げました。私が会長を務めています。現在の会員は 35 名です。高校生から 60 歳代まで、ほとんどが男性です。また、練習場所が阿見町なので、県南地区に住んでいる人が大部分です。ロンドンとソウルのオリンピックで日本代表チームのトレーナーをやっていた方も会員の一人として参加しています。」

← 約 25ｃｍ →

☆石崎さんが出場した試合は？

「今年の１月にユニバーサルボッチャ協会主催の試合に出場しました。チーム戦で３位に入賞しました。」

＜ 取材を終えて ＞

ボッチャという競技について、石崎さんは丁寧にわかりやすく説明してくださいました。ボールの実物も準備され、実際に触れさせていただき、とても身近に感じることができました。

ボッチャについてお話しされる石崎さんは、とても生き生きとしていました。石崎さんのボッチャに関する１番の悩みは、「練習場所の確保」だそうです。

確かに月１回の練習だけでは、強くなるのも難しそうです。2021 年には国体の正式種目になることが決定しているとのこと、石崎さんたち「茨城ぼっちゃ倶楽部」の皆さんが、思う存分練習できる場所が早く見つかることを願わずにはいられません。

就労支援施設訪問

★株式会社オーガファーム

所在地　つくば市吉瀬１７７３－２
ＴＥＬ　０２９－８６９－９５７９

会社概要

- 配達弁当
- ハウスクリーニング
- 食堂「三日月」
- 農場（水耕栽培）

水耕栽培でベビーリーフを作っていました。ベビーリーフはパック詰めされて、直売所や近くのスーパーなどで売られるそうです。隣のビニールハウスでは、水耕栽培に何が適しているか、色々な野菜で実験していました。

少し離れたところに「三日月」というレストランがありました。名前は和風ですが、建物は洋風でした。オーガファームで獲れた野菜がメニューに使われていました。

ネットで注文を取り、１日約 300 食を配達するそうです。作業には約 10 人の方々が携わっています。お弁当は 400 円、500 円の２種類です。彩がきれいで、とてもおいしそうでした。

「おうちプラス」という名称で、個人の家や集合住宅のハウスクリーニング、除草作業などを行っています。

☆平成 26 年創業の若い施設でした。
代表の榊原さんはチャレンジ精神旺盛な方で、ベンチャー企業のような感じがしました。通ってこられる障害者の方々は 25 名。その人の特性を考慮して担当を決めているそうです。障害者という見方はしたくないので、送迎の車には施設名は入れていないとのことでした。職員も通所者も≪みんな仲間≫という雰囲気の施設でした。

★みのるの郷

牛久市さくら台１－７６－３
定員５０名（登録者数７４名）
職員５５名
知的・身体・精神・高次脳機能障害
グループホームも併設

＜みのるの郷の一日＞
午前　ウオーキング（暑い日・寒い日・雨の日・地域交流などによりコースを変えて毎日行う。）
昼食
午後　作業（コーヒー班・織物班・パン班・農園芸班・イオン清掃班・継続班・機能訓練室）

作業班は作業別に部屋が分かれている。
特にパン班は、牛久市内の学校給食用パン請け負う工房をもっている。一般販売用のパン・ラスク製造・移動販売・イベント参加など規模が大きい。作業所に通いながら、パン工房に就職した人もいる。

月曜日から金曜日　　作業中心
土曜日　　クラブ活動（外部講師を招いて、フラダンス・ネイル、化粧・習字・カラオケ・ディスコなど）

何事も５，６人のグループを作ってグループワークを行う。
人との付き合い方を学び、社会性の向上を図る。

みのるの郷の目標
1. 自分が感じたこと、考えていることを「言う」
2. 相手の言っていることを「聞く」
3. 色々な意見があることを、「知る」「我慢する」「譲り合う」

感想　取材の時間が足りないと感じるくらい広くて充実した設備のある施設でした。重度の方も多い中、整然と作業をしたり、楽しんだりしていました。このような施設が地域格差なく存在してくれることが当事者の充実感や社会参加、そして家族の安心につながるような気がします。

会員の声

≪県の高次脳機能障害支援コーデイネーターのサポートを受けて≫

私の妻は、約２年前の事故で脳を損傷し要介護３となり、かなり重い高次脳機能障害を持っております。週に４日、日帰り施設にお世話になっています。最近、施設を変わったのですが、次の様な問題行動を起こして、施設の方を困らせてしまいました。例えば、隣の人との関係を考慮して座席を変更したら、怒ってしまった。リハビリのレベルを少し上げようとすると拒否してしまい、担当ＰＴを交替する結果になった、等です。

ケアマネさんの調整で、コーデイネーターの方に現場まで出向いて頂き、施設の方と私も加わり、相談にのって頂きました。高次脳機能障害者は、困った言動をする事がありますが、それがどんな事情でそうなるのか、個別の言動について説明して下さり、対応方法の提案もありました。例えば、座席の変更については、障害のない人でも空間刺激の変更（＝座席の変更）を好まない、（例：通勤電車は同じ座席を好む）かたや、高次脳機能障害者は外部刺激の変更に敏感になっているので、工夫して他の方法で対応すると良いという事です。問題言動の背景事情まで含めて教えていただき、大変参考になりました。

私はこれまで、高次脳機能障害に関する書物を結構読みましたが、実際はいろいろ不適切な対応をしていた事に気づかされました。個人的な個別の相談にも電話などで応じていただけるとの事ですので、今後も何かあったら支援をお願いするつもりです。孤立感を覚えがちな家族にとって非常に心強い限りです。

（黒瀬宰基）

お悔み

家族会員の菅原靖男様が、平成 29 年 7 月 29 日に逝去されました。菅原様は、本会設立当初は会計を引き受けて下さっていました。副会長としても、会の運営に携われました。当事者の奥様を介護されながらのご尽力でした。ここに謹んでご報告し、ご冥福をお祈りいたします。

編集後記

広報誌作りに携わるようになって、1 年が過ぎました。まだまだ独り立ちできずに、賛助会員である先生にお世話になりながらの発行です。先生のお宅に伺い、かつての職場の先輩であった奥様と 3 人でおしゃべりをしながらの紙面づくりなのですが、それがまた私の楽しみの一つにもなってしまいました。本来なら、早く先生の手を離れて、独り立ちをしなくてはならないのですが、この心地よい時間をもう少し楽しみたいと思っている広報係です。